

光院のたえたるあとに、皇統再興あれば、ござがのゐんの御れいとも申ぬべし。八まんの御たくせんに、椿葉のかげふた、び改としめし給へば、そのためしをひきて、椿葉記と名づけはんべることしかり。

## 永享五年二月日書畢

入道無品親王道欽

〔古事記中應神〕於是其兄慷慨弟之婚、以不償其宇禮豆玖之物、爾愁白其母之時、御祖答曰、我御世之事能許會此二字以音神習、又宇都志岐青人草習乎、不償其物、恨其兄子、乃取其伊豆志河之河島之節竹而作八目之荒籠、取其河石、合鹽而裏其竹葉、令誼言、如此竹葉青、如此竹葉萎而青萎、又如此鹽之盈乾而盈乾、又如此石之沈而沈臥、如此令詛、置於烟上、是以其兄八年之間、于萎病枯、故其兄患泣、請其御祖者、卽令返其詛戸、於是其身如本以安平也、此者神宇禮豆玖之言本者也

## 〔源平盛衰記六〕小松殿教訓父事

小松殿重盛ハ弟ノ殿原ニ向テ、イカニ加様ノヒケウハ結構セラレ候ヅヤ、縋入道殿コソ老耄シ給テ、アラヌ振舞アリ共、今ハ各コソ家門ヲモ治メ、惡事ヲモ可被宥申ニ、相副タル御事共候哉ト被仰ケレバ、宗盛已下ノ人々苦々敷ソ、ロキテゾ見エ給ケル、内大臣ハ中門廊ニ立出給ヒ、サモ然ベキ侍共ノ并居タリケル所ニテ仰ケルハ、重盛ガ申ツル事共憊ニ承リツルニヤ、去バ院參ノ御共三出バ、重盛ガ頸ノ切レンヲ見テ後ニ仕ベシト覺ルハイカニ、今朝ヨリ是ニ候テ、加様ノ事共叶ハザランマデモ、申バヤト存ツレドモ、此等ノ體ノアマリニ、直騷ギニ見エツル時ニ歸ツルナリ、今ハ憚ル處有ベカラズ、猶モ御院參有ベキナラバ、一定重盛ガ頸ヲゾ召レンズラン、各其旨ヲコソ存ゼメ、但サモ未仰ラレヌハ、何様成ベキヤラン、去バ人々參ンヤトテ、又小松殿ヘゾ被歸ケル、

〔吾妻鏡十六〕建久十年○正治

八月廿日庚辰、尼御臺所

○北條

御逗留于盛長達

○安

入道宅

召景盛

被

被歸

ケル、

ケル、